

# おわりに

昨年の一二月半ばに、突然、木村恒夫さんの訪問を受けました。木村さんは、私が松沢教会在任中に、キリスト教基礎講座を受講されました。同志社中学在学中に触れた聖書とキリスト教が芽生えてきた、ということだったようですが、とにかく奥様もご一緒に受講され、教会生活に入るのに、病身の奥様のご希望もあって、ご自宅に近い成城カトリック教会で受洗して入信されました。それ以来の出会いですから、驚いたのですが、出版の事業を始めておられることを知りました。

そして、単なる解説ではなく、「私は、聖書をこう読む」ということで書いて欲しいと依頼されました。かねがね、キリスト教入門用のテキストを執筆しようと準備していたのですが、実際に、キリスト教基礎講座の回を重ねるに従って、多くの教会で利用してもらえるようなテキストを書くことのむつかしさを感じて、途中半端のままでいました。

しかし、「私は、聖書をこう読む」というのであれば、人がどう思おうと自分の思いを書けばいいのですから、二つ返事で引き受けました。一三〇頁の予定ということでしたので、一カ月で書けるだろうと思って、一月の下旬から書き始めました。三月には、引っ越しを予定していたので、締め切りが二月末というのも好都合だったのです。

私は、現在のキリスト教が、倫理を強調するあまりに、信者の方たちにあまり元気がないのは、旧約をしっかり土台としていないからだ、という思いに駆られていました。ですから、松沢教会時代にも、旧約の学びに力を入れましたし、現在の永山教会に移ってからも、同じようにしています。そして、旧約を学んだ方たちから「聖書が面白くなりました」という声をよく耳にしました。旧約を「福音」として読むことが、イエスの示そうとされたことではなかったのでしょうか。

旧約を倫理的に読むから、具合の悪い話が満載されている旧約が敬遠されてきたと思うのです。ありとあらゆる人間臭い、時としては目をそむけたくなるような出来事の背後に、じっと見守る神の目が見えてくると「面白く」なるのです。旧約に登場する人物は、現在の私たちの姿でもあります。

「創世記が面白い」、「イエスが面白い」というタイトルも、面白おかしいという意味での「面白さ」ではなく、「うーん」と唸らざるをえなかったり、そうだ、そうだと共感できる「面白さ」を少しでも知ってほしいという願いがこもっています。あまりにも心理学的な解釈が多すぎるというご批判を受けるだろうということは、覚悟の上で書きました。人間を理解する、ということは、心の動きを無視しては不可能だからです。

最後に、この執筆のために何度もご足労をおかけしたエマオの秋葉恭子社長とこの貴重な機会をご提供いただいた木村恒夫会長に心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

石川 和夫

一九九八年三月